

シャンソン・フランセーズ日本ヴァージョン。プロ・アマ問わず多くの歌手がいると推察する。またプロ・アマ問わず個人で、あるいはカルチャー教室・同好会で教えている方々の下へ集まる歌好きも多いと推察する。でもその中で発音の厳しい先生や発声の厳しい先生は少ないと確信し実感する。もっともプロを育成しているわけではないので期待も持てない。歌う人はフランスの歌を楽しむことが主なる目的だし、先生の方も商売だから。需要と供給の法則。温和な人間関係の無言のバランス。でも逆にプロよりアマチュアの方の発音が良かったり、歌が上手だったりすると「シャンソンのプロって何？」と思ったりする。また「アマチュアと差がないとつまらないなあ」と思ったりする。やはり「プロ」というのは実力で一段上であってほしいから。

それにしても何とも複雑な歌がある。「Mon Dieu(モン デュー)」だと思っていたが、モンジュー…もんじゃ焼きか？モオ～ジュ～…焼肉か？ステーキか？モンドュー…スパのマッサージか？マンデュー…饅頭？同じ歌だと思っていたのに多種多様である。遠慮がちに(どこが?) 希望を言えば Mon の Mo は「モ」と「マ」の中間の発音が望ましい。叶わぬなら「モ」の方でお願いしたい。「Mon amant de Saint-Jean(サンジャンの私の恋人)」だと思っていたが「サンジャンの人波に～」ギョ！サンちゃんって誰？濁点のあるとなしではテンで違う。フランス語の「Joue(頬)」の場合、ジュウとシュウの中間で、実際フランス人でも人によって発音が別れるが、どちらに寄ってもその単語と解る。日本の発音の場合、同音異義語的に合致してしまう別の語があるのが悩ましい。そして「ア」と「エ」の中間音の代表格「encore」は「アンコール」だと何だか変。「オンコール」を希望する。またバルバラの「黒い鷲」の出だし「Un beau jour」の「Un」は「アン」と「エン」の中間音だが、日本語的「アン」で始めるとアンポンタンみたいなの…。まだ「エ」に近い方が救われる。他人の事は時には知らん顔するのがマナー的なところもあるけれど、必要があつて聴かなければならない時にはちょっと苦痛である。でも不思議なのは、しょっちゅう例に出すようだがワサブローさんの場合、かなり日本的な発音なのに上記の部分は確かだから違和感はない。逆に教科書通り流暢っぽく発音していても「？」という人もいる。それはきっと音を話すのと言葉を話すのとの違いだと思う。事実かジョークか英語の「How much(ハウ マッチ)」を「ハマチ」と言った方が通じた的な感覚である。そう考えると一音一音ハッキリくっきり発音しすぎるのと、逆にポワワ～と曖昧に流されるのは同じくらい耳につらい。何せ「言葉」というのは「つながる音のバランス」で成り立っているから。

さて、上記の「Mon Dieu」で印象に残っている方がいる。歌手の M.T さん。この方、発声に厳しく発音にもこだわる。この方が歌った「Mon Dieu」はライトの光りが飛んできたかと思えるほど迫力があって素敵だった。機会があつたらまた聴いてみたい。そういえばこの方には余計なパフォーマンスがない。そして歌っているときの視線はまっすぐで力強くきれいだ。そこで思い浮かぶが、歌などの表現物において「圧倒」とは相手を打ちのめすことではなく、相手の神経を開放することだと思う。

最後にもう一つ。シャンソン・フランセーズ日本ヴァージョン。低い声で歌うものという定義はどこから来たのだろうか？それが高くて低ければ低いほど良いという誤解はどこから生まれたのだろうか？低すぎるのは悪魔みたいで地獄を連想する。(2013.4.5)